

『石狩郡ノ図』について

About "Ishikari Gun No Zu" -Records of flood control facilities
at Ishikari River in the early Meiji Period-

工藤 義衛*

Tomoe KUDOU*

要 旨

北海道大学所蔵の「石狩郡ノ図」に記載された盛土、排水溝、橋、地名を示すとともに、図の製作年代、盛土の施工者について分析をおこなった。その結果、同図に記載されているのは明治4ないし5年における石狩川河口周辺部の堤防及び排水などの状況であることが明らかになった。また、同資料に見られる堤防、排水の施工は、近世に遡るもので、石狩場所を請け負っていた村山家が行ったとされる治水工事の一部である可能性が高いと考えられる。

キーワード：場所請負人村山家、石狩川治水、開拓使、堤防

はじめに

筆者は2007年から博物館、大学等の研究機関が所蔵する石狩市に関係のある歴史資料の所在確認調査を行ってきた。調査の中で北海道大学附属図書館北方資料室に所蔵されている明治初期の絵図に注目し、「石狩郡図（三番）」について資料紹介をしたところである（工藤，2011）。今回紹介する「石狩ノ郡図」は「石狩郡図」と同時期に作成されたもので、関係が深いものである。また、その内容も排水や橋の位置や規模、盛土など開拓使文書では知りえなかった情報が多い。本稿では、「石狩郡ノ図」の内容を紹介するとともに、その内容について、若干の考察を加えておきたい。

石狩郡ノ図の概要

「石狩郡ノ図」（図1、写真1、2、3）は、縦27cm、横88cmで、和紙に現在の石狩市本町市街付近から札幌市茨戸付近までの川筋が描かれている（図1）。川筋を描いた図はほぼ同じものが

2つあり、このふたつの図が一枚につながり合っている。両図の継ぎ目には朱で十六と書かれている。

この2つの図はともに本町付近から茨戸付近までの川筋を描いた図に、盛土、水抜などの注記を



図1. 石狩郡ノ図に描かれている範囲
(明治24年北海道実測切図を改編)

* いしかり砂丘の風資料館

〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

記入したものである。本稿では便宜的に、向かって左側の図を甲図（写真2）、右側の図を乙図（写真3）として記述を進めることとする。また、「石狩郡ノ図」に記載されている注記を甲図は表1、乙図は表2に示した。

1) 各図の特徴

甲図にのみ見られるのは、右端にある「高畑居久馬」の名前とその下の「高畑」の朱印である（写真4）。また「水抜」（水ヌキ）を示す二本線も甲図にのみ見られるものである。盛土の延長と高さ範囲、笹、柴、伐木などの川岸の状態に関する注記は甲、乙両図に見られるが内容は若干異なっている（写真5）。甲図の裏には「石狩川地図 三番 四枚之内」乙図の裏には「石狩川之地図 三番 四枚之内」と注記がある（写真6）。

乙図には高畑の名前はない。また右端に「両縁合間数七千八百六十間 橋寄而九ヶ所内五間橋五ヶ所三間三ヶ所四間一ヶ所六間一ヶ所 水抜十一ヶ所」とある。

先述したように甲、乙両図は、本町付近から茨戸付近までの川筋を描いた図を背景図として用い、この図に様々な注記が加えられている。そこで、まず背景となっている図を紹介した後、これに加筆されている盛土などの注記の内容について見て行くことにしたい。

2) 背景図について

背景となっている図は、河口やや上流の本町地区付近から茨戸付近までの石狩川本流といくつかの支流が描かれたものである。図はかなりデフォルメされており一種の模式図になっている。このように甲図乙図ともによく似ているが乙図のみ川部が青色に塗られている。地名、川名、施設名も甲、乙両図に共通しておりこれも背景図の一部と考えてよいだろう。いずれも川側から黒字で記入されている。

地名は「トクビタ」「花畔村」「生振村」の三つ、川名は「マクンベツ川」「ハラト川」「シノ

ロ川」「ウツナイ川（ウツナイ川六間橋）」の4つである。図中にはこのほか川名の注記はないが左岸に7ヶ所、右岸に1ヶ所の川が描かれている。なお、「ハラト川」は位置から見て現在の発寒川であろう。発寒川の名称については幕末から明治初期まで表記が定まらず、発寒川川口部の地名である「ハラト（バラト）」を川名として用いることがあった（井口、2008）。

施設名としては左岸側に「西会所」「マクンベツ漁小屋」「ピラカヤウス下漁小屋」「ピラカヤウス漁小屋」「ヲタベリ漁小屋」の5ヶ所、右岸側には「中花畔漁小屋」「上花畔漁小屋」「発寒太漁小屋（乙図ではハッサムブト漁小屋）」「札幌太御蔵（乙図ではサッポロブト漁小屋）」の4ヶ所がある。

3) 注記

上述の地名等が川側を下にして黒字で記載されているのに対し、注記はその反対に川側を上にし、朱字で記載されている。また、内容も甲図、乙図それぞれで異なっている。以下記載内容ごとに見て行きたい。

①橋、水抜、通行路

橋は左岸に8ヶ所（2ヶ所、四間橋2ヶ所、五間橋3ヶ所六間橋が1ヶ所）、右岸に1ヶ所（五間橋）ある。ウツナイ川を除き、橋がかけられている川に名称の注記はない。二本線で表わされる「水抜」は、甲図のみに見られるもので、左岸に7ヶ所、右岸に2ヶ所ある。水抜に橋の注記はない。橋、水抜が最も多いのは、左岸のピラカヤウス漁小屋と花畔村の間で、橋が4ヶ所、水抜が2ヶ所ある。右岸には水抜が2ヶ所ある。

図の左端、左岸の西会所付近から川岸に沿って点線が引かれている。この点線は花畔村付近で右岸に渡り札幌太御蔵の先で再び川に入り、シノロ川の中央に伸びている。おそらくこの点線は、道路及び渡船の航路を合わせた石狩札幌間の交通路を表しているものと考えられる。

②その他注記

その他に盛土の延長や規模、川岸の状況などの注記がある。乙図に盛土の延長は「七千八百六十間」となっている。これは約14kmになる。ただし、注記にある延長を合算すると三千三百七十一間（約6.1km）である。乙図に二本線で表わされる水抜の記号はないが、注記に箇所数が示されている。表記の仕方にも違いがあり甲図の盛土に関する注記はやや離れた場所から線を引いて記入してある、これに対し乙図の注記にはこうした指示線は見られない。全体に乙図のほうが記載が整理されている印象がある。ただ、乙図には「ヒラカヤウス下」を「ヒラカヤウ」「ウツナイ」を「ウツナ」とするなど誤記が目立つ。

石狩郡ノ図の年代

「石狩郡ノ図」に製作月日は記載されていないが、手掛かりのひとつは甲図の右端にある「高畑居久馬」という名前である。高畑居久馬とは、開拓使官吏の高畑利宣（たかばたけとしよし・1841～1922）のことである。高畑は現在の京都府南区に生まれ、明治3年大阪の開拓使北海道物産会所に入り、翌明治4年に北海道に渡った。北海道での高畑は、開拓使の札幌本庁に勤務し、主に開拓地の調査、測量業務に携わった。明治5年の上川調査は、高畑の仕事として良く知られているものである。こうした高畑の経歴から見て彼が「石狩郡ノ図」の製作に関わっていたとしても不自然ではない。

高畑は最初「好太郎」を名乗り、次に「居久馬」その後「利宣」と名前を変えた。「居久馬」という名は明治3年9月ころから明治5年4月ころまで使っていたという（新旭川市史編集会議編，1994）。いつまで「居久馬」を用いていたのかさらに細かく見ると、明治5年4月の上川調査の出張辞令は4月9日付けで「高畑居久馬」となっており、同月15日付けの開拓使掌に任ずる辞令は「高畑利宣」である（滝川市郷土館編，1994）。高畑が当時在籍していた開拓使札幌本庁

開墾掛の業務日誌である「細大日記」を見ると明治5年4月16日の項に「高畑居久馬大藤卓雄使掌拝命」とある。しかし、同月30日の項には「高畑利宣上川郡江出立」とあり、以後日誌中の表記は全て「高畑利宣」となっている（札幌市編，1987）。このようにみると「利宣」を名乗り始めたのは、開拓使掌を拝命した明治5年4月中旬頃からであり、「高畑居久馬」の名前のある甲図は、明治5年4月中旬以前に作成された可能性が高いと考えられる。

年代についてのもうひとつの手掛かりは、図中の「生振村」「花畔村」の記載である。生振村、花畔村はいずれも明治4年3月に岩手県、宮城県からの移住により開村した村である。（札幌市編，1986）また、前出「細大日記」明治4年5月25日の項に「ハンナクロ」を「花畔村」「ヲヤフル」を「生振村」と改正する旨の達が掲載されている。（札幌市編，1987）細大日記の表記は、5月25日のこの達を挟んで「ハンナクロ」は「花畔村」「ヲヤフル」は「生振村」に変わっており、少なくとも開墾掛ではこの達しをもって表記を変更したものと考えられる。当時高畑は開墾掛に在籍しており、彼が「石狩郡ノ図」作成に関わっていたとすれば「花畔村」「生振村」の表記がある同図は明治4年5月以降に作成された可能性が高いと考えられる。

これらの点を総合すると「石狩郡ノ図」が作成されたのは、明治4年5月から翌5年4月中旬までの間と推定される。

「盛土」について

「石狩郡ノ図」には、盛土の規模や範囲についての注記が多く見られる。この盛土は、主に左岸に見られ、2尺から4尺の高さで川沿いに延長約14km以上ある。形状からみて堤防だと推定される。それではこの堤防を造ったのはいったい誰なのだろうか。

まず北海道開拓使について検討してみよう。開

拓使は明治3年1月に石狩の行政権を兵部省から引き継いでおり、「石狩郡ノ図」が作成される明治5年4月中旬までに工事を実施できるのは明治3、4年と5年の春である。『開拓使事業報告』によれば、開拓使は明治4年に約2,524円、同5年は約5,508円を治水工事に費やしている。このうち治水工事費の約95%が一件100円以上の治水工事の費用である。工事内容は石狩から札幌市街への物資の搬入路であった篠路川の整備、創成川建設、豊平川及び豊平川からの分水鴨々水門の整備、修繕などで、石狩川の堤防工事は含まれていない。いずれも札幌市街の水害対策、物資輸送に関わる工事で当時、開拓使がいかに札幌市街建設を重要視していたかよくわかる。残り5%は100円以下の小規模工事で、明治4年が約125円、5年は約282円である（大蔵省編、1885）。この予算では延長14kmもの堤防工事は困難ではないかと考えられる。

残るは明治3年に施工された可能性であるが、『開拓使事業報告』には明治3年の治水工事の内容や金額について記載はない。ただ当時の状況を考えると、先に見たように開拓使の関心は札幌市街の建設にあり、札幌市街と直接関係のない石狩川本流の堤防工事を実施した可能性は低い。また、この頃は札幌市街の建設が本格化した時期で、札幌及び石狩は諸施設の建設が急ピッチで進められていた。仮に堤防建設を意図したとしても工事にあたる労働力の確保は困難ではなかったかと考えられる。

石狩市街は明治4年の春に洪水に見舞われ、倉庫や水産税の収納会所などが流される被害が出た。これに対して開拓使石狩出張所では護岸及び水勢を弱める杵類の設置や水抜水路の提案をしている（注2）。しかし、この中に堤防の修理、新築は含まれていない。こうした点を考慮すると、明治4～5年に開拓使が「石狩郡ノ図」に記録された堤防を建設した可能性は低いと考えられる。また、明治3年についても、石狩を管轄していた兵部省も、支配した期間がごく短く、維新の混乱

期であったことを考えると、これも可能性は低いと考えられる。

近世にまで遡ってみるとどうだろうか。石狩場所請負人であった村山家の事跡を書いた「東西蝦夷地旧請負人村山伝次郎履歴概略調」（以下「概略調」）には「石狩川修理」として次のような記述がある（長谷川編、1973）。

「波止場及ビ營繕修理、大川筋及ヒ枝川堤防新設修繕共従来手人数ヲ以テ建築修理仕来候処、弘化二年乙巳年洪水ノ為メ大破損ニ及ヒ越後国新潟ヨリ堤防水理熟練ノ者十名ヲ雇越シ、是二手人数ヲ加ヘ連年間断ナク安政四年丁巳マデ自費支弁ヲ以テ新築及修理ヲ加フ。其他架橋道路及小休所、休泊所共スベテ自弁ヲ以テス。」

石狩場所を請け負っていた村山家は、石狩川（大川）及びその支流で堤防の新設修理を行っていた。弘化2（1845）年に洪水のため大きな被害が出たため、越後新潟から治水工事に熟練した者を10名雇い、さらに50名を作業にあたらせた。この工事は安政4（1857）年まで村山家の負担により続けられた。そのほか橋や道路、休憩所、宿泊所の整備も自費で行っていた、というのである。

既にみたように明治以降にこのような盛土工事が行われた可能性は低く、「概略調」にある村山家の堤防が「盛土」である可能性が高い。

「概略調」の記録は、石狩川治水工事の最も古い記録であるが、実際の工事位置や規模など実態は不明であった。しかし「石狩郡ノ図」は、その手掛かりになるものと思われる。

おわりに

本稿では、「石狩郡ノ図」の概要と同図が明治4～5年に石狩川最下流部にあった堤防（盛土）、排水（水抜）、交通路、河川の状況などを記録したものであることを示した。また、少なくとも堤防（盛土）については、近世末に村山家によって建設されたと推定される。

本図については、「石狩郡図（三番）」につい

て」（工藤，2011）で，簡単に触れておいた．今回改めて「石狩郡ノ図」と向き合って感じたのは，「石狩郡図」と「石狩郡ノ図」の双方に見られる体裁の粗さである．両者とも図は本来の地形からほど遠くデフォルメされており文字も整っていない．あたかもフィールドワークから帰って来た調査者が野帳の内容を転記した作業図のようである．作業図は目的によって細部が違うものが何度も作り直されることがある．「石狩郡ノ図」が良く似た二つの図がつなぎ合わされているのは，こうして増えた作業図を捨てることもできず保存しておくためだったのではないだろうか．今後は，他に同様の作業図の体裁をとった図が残っていないかどうかやこれらの図を利用した資料の所在について調査する必要があるだろう．

謝辞：本稿をまとめるにあたり，北海道大学附属図書館北方資料室，北海道立文書館には，資料調査等にご協力をいただきました．石狩市郷土研究会村山耀一会長には，「石狩郡ノ図」解説にあたってご教示いただきました．井口利夫氏には，日頃より開拓使時代の地図，地名についてご指導頂いております．この場をお借りして感謝申し上げます．最後に，日頃から資料検索などについての協力を頂いている石狩市民図書館，いしかり砂丘の風資料館の同僚，諸先輩に感謝の意を表させていただきます．

注

注1 『石狩郡ノ図』（北海道大学附属図書館所蔵・図類28）

注2 『明治四辛未年 石狩往復 壺』（北海道立文書館所蔵・簿書306）

引用文献

長谷川嗣編，1973．石狩場所請負人村山家記録／石狩町史資料第三号．p5．石狩町．
井口利夫，2008．伊能間宮蝦夷図の石狩勇払横断ルートの地名（2）．アイヌ語地名研究，11：43-64．
工藤義衛，2011．石狩郡図（三番）について．いしかり砂丘の風資料館紀要，2：1-12．
大蔵省編，1885．開拓使事業報告 第2編．大蔵省．

札幌市編，1986．新札幌市史／史料編2．pp266-267．札幌市教育委員会．
札幌市編，1987．新札幌市史／史料編1．pp924-925．札幌市教育委員会．
札幌市編，1989．新札幌市史／通史編1．札幌市教育委員会．
新旭川市史編集会議編，1994．新旭川市史／第一巻．p694．旭川市．
滝川市郷土館編，1994．高畑利宣文書目録．pp12-13．滝川市郷土館．

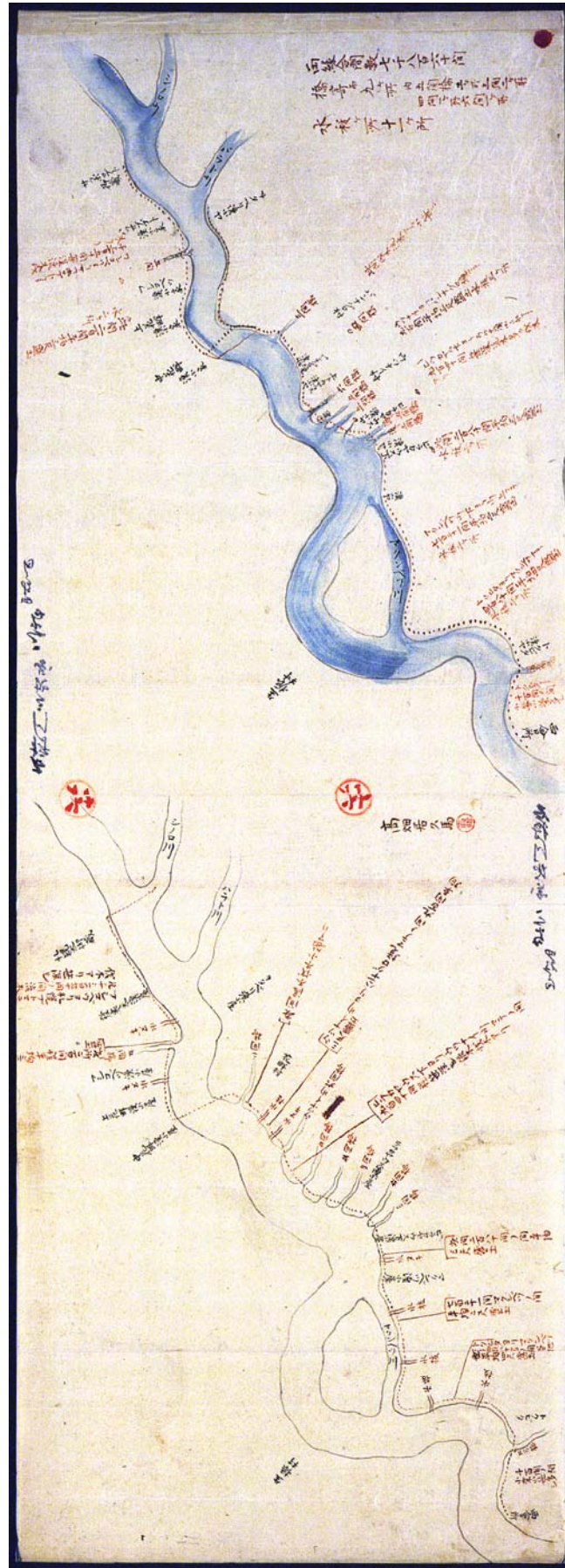


写真1. 石狩郡ノ図 (全体・左側が甲図, 右側が乙図)

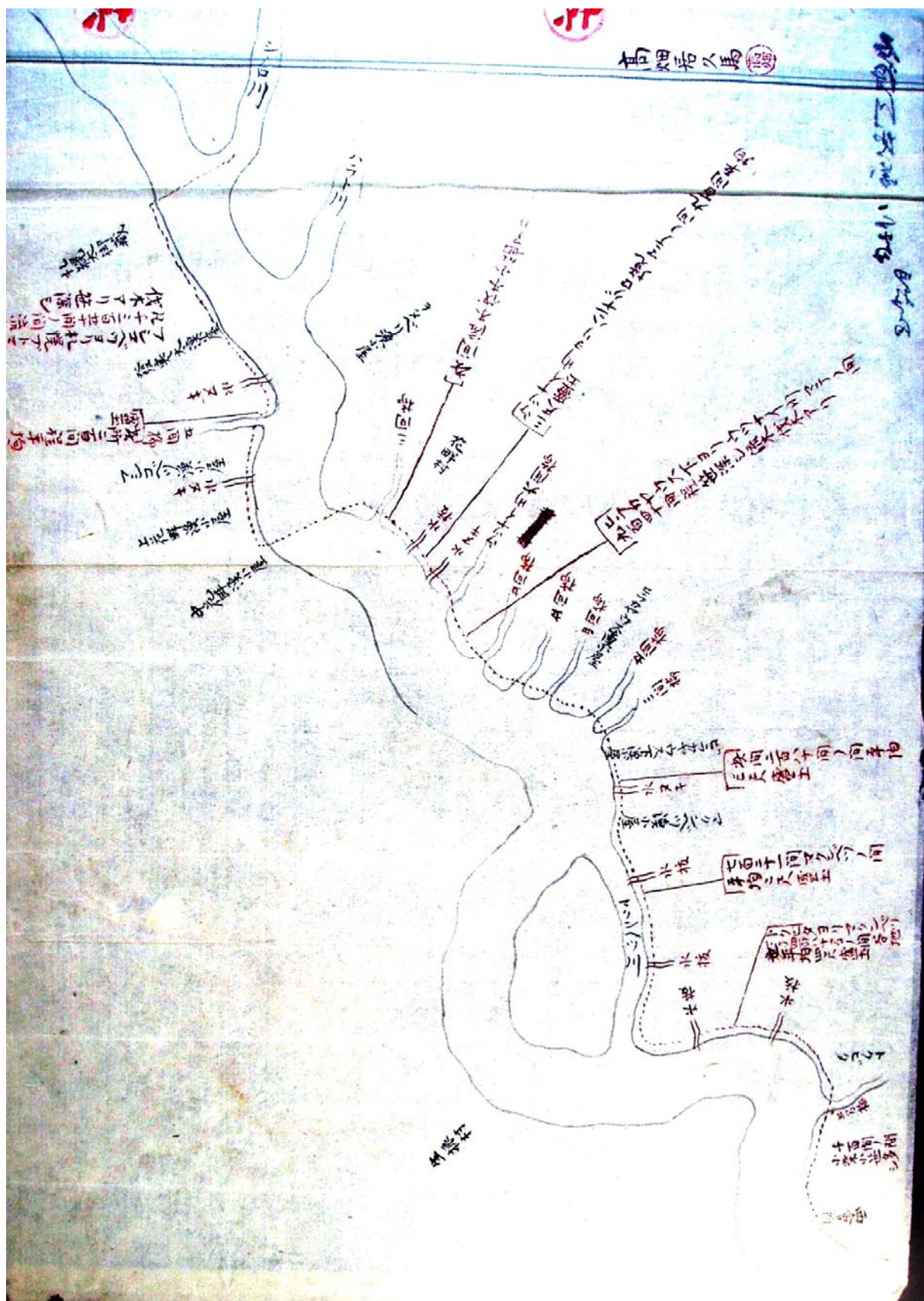


写真2. 石狩郡ノ図 (甲図)

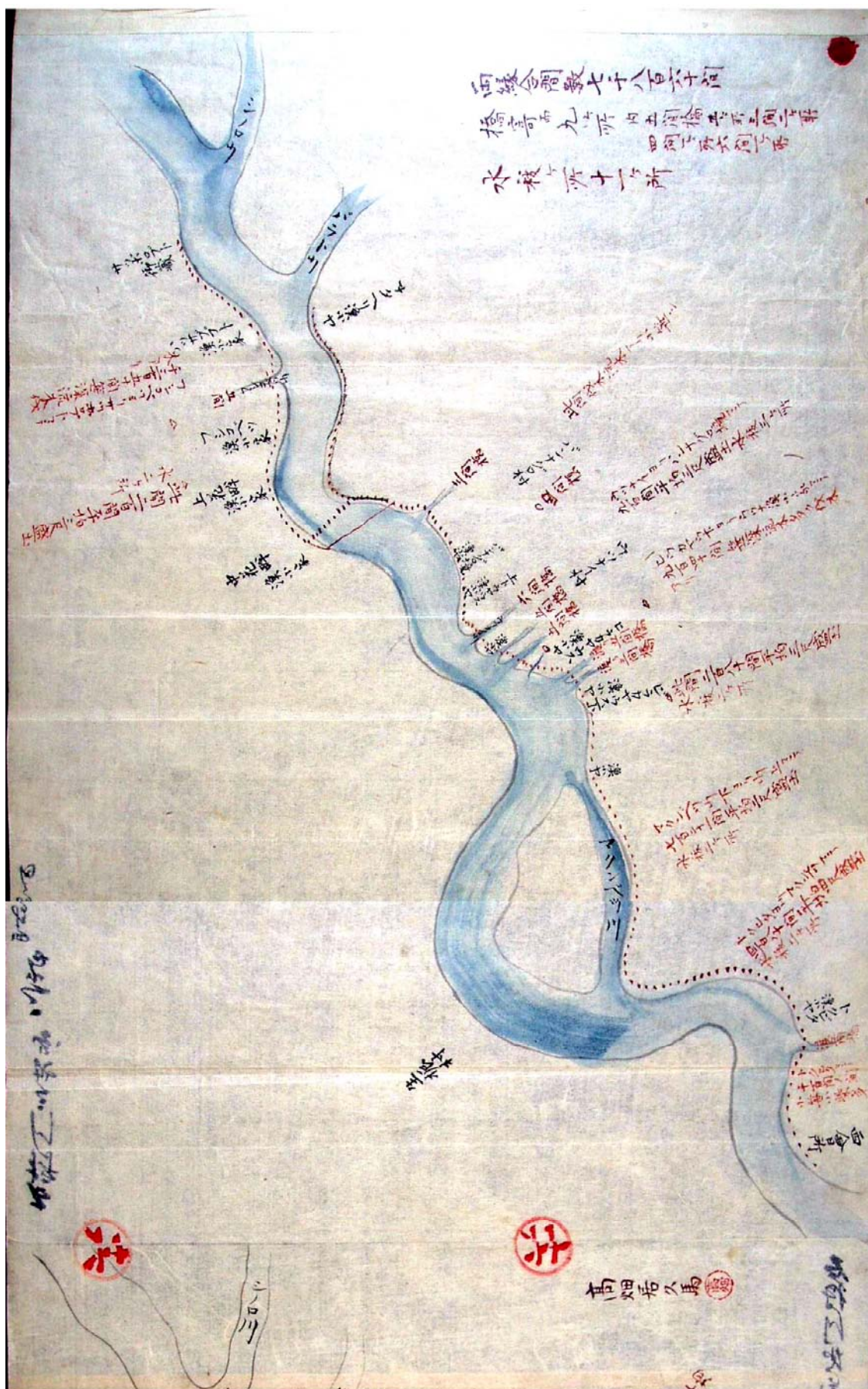


写真3. 石狩郡ノ図(乙図)

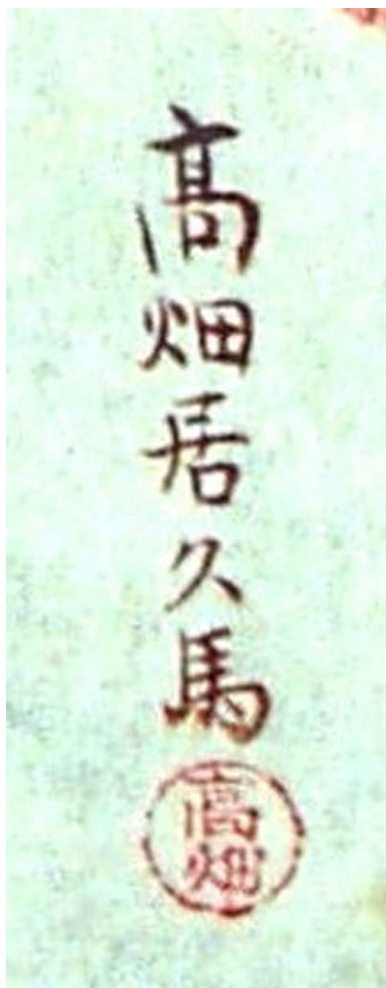


写真4. 高畑居久馬の署名と印（甲図）

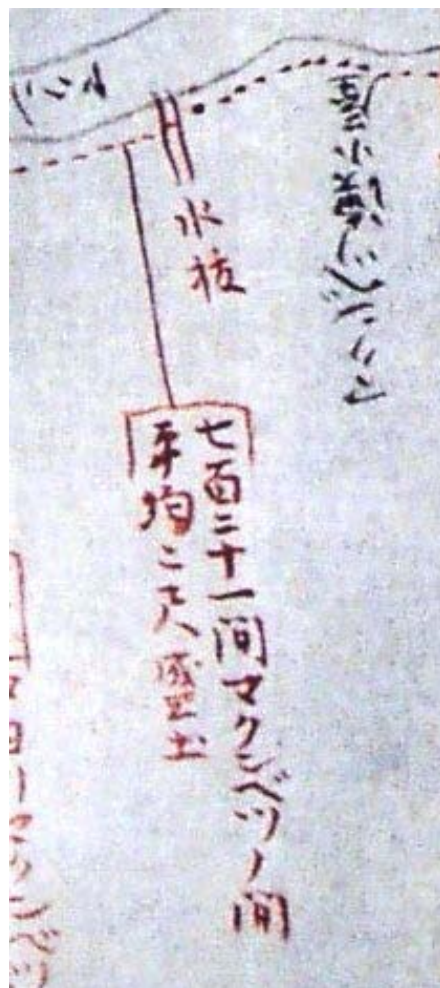


写真5. 左岸の盛土の注記（甲図）

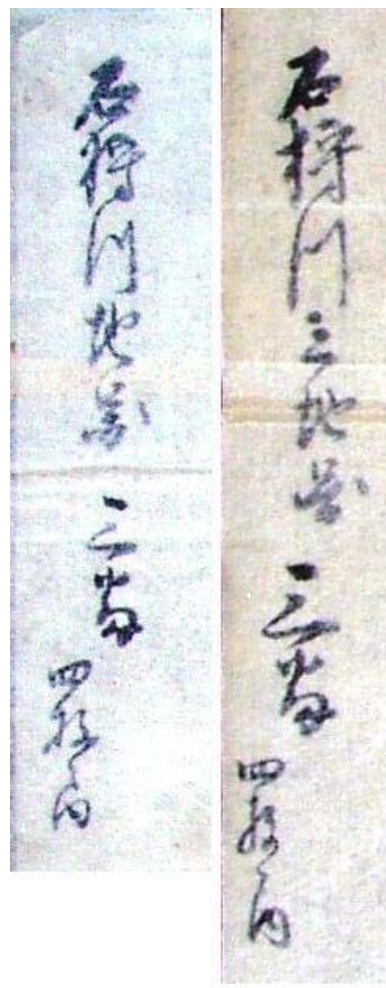


写真6. 「石狩川地図」の注記

表1. 石狩郡ノ図(甲図)

	注 記	種別	文字色	文字の方向
	西会所	施設	黒	川
	千百間ノ間小柴小笹多シ	注記	赤	陸
	四間橋	橋	赤	川
	トクビタ	地名	黒	川
	水抜	排水	赤	陸
	トクビタヨリマクンベツマテ四百八十間ノ間谷地也平均四尺盛土	注記	赤	陸
	水抜	排水	赤	陸
	水抜	排水	赤	陸
	七百二十一間マクンベツノ間平均三尺盛土	注記	赤	陸
	水抜	排水	赤	陸
	マクンベツ漁小屋	施設	黒	川
	水ヌキ	排水	赤	陸
	此間二百八十間ノ間平均三尺盛土	注記	赤	陸
	ピラカヤウス下漁小屋	施設	黒	川
左	三間橋	橋	赤	陸
	五間橋	橋	赤	陸
岸	ヒラカヤウス漁小屋	施設	黒	川
	四間橋	橋	赤	陸
	五間橋	橋	赤	陸
	五間橋	橋	赤	陸
	ヒラカヤウス下ヨリウツナイ川マテノ間九百四十間程笹深シ流木伐木アリ	注記	赤	陸
	ウツナイ川六間橋	橋	赤	陸
	水ヌキ	排水	赤	陸
	ウツナイ川ヨリハンナグロ境マテノ間九百間平均三尺盛土	注記	赤	陸
	水抜	排水	赤	陸
	花畔村	地名	黒	川
	此間流木伐木小笹アリ	注記	赤	陸
	三間橋	橋	赤	陸
	ヲタベリ漁小屋	施設	黒	川
	ハラト川	川名	黒	川
	シノロ川	川名	黒	川
	生振村	地名	黒	川
	中花畔漁小屋	施設	黒	川
	上花畔漁小屋	施設	黒	川
	水ヌキ	排水	赤	陸
右	フシコベツ漁小屋	施設	黒	川
	五間橋	橋	赤	陸
岸	此所二百間程平均三尺盛土	注記	赤	陸
	水ヌキ	排水	赤	陸
	発寒太漁小屋	施設	黒	川
	フシコベツヨリ札幌プトマテ凡千二百五十間ノ間流木伐木アリ笹深シ	注記	赤	陸
	札幌太御蔵	施設	黒	川

表2. 石狩郡ノ図（乙図）

	注 記	種別	文字色	文字の方向
左 岸	西会所	施設	黒	川
	トクビタマテ千百間ノ間小笹小柴多シ	注記	赤	陸
	渡り四間橋	橋	赤	川
	トクビタ漁小屋	地名	黒	川
	トクヒタヨリマクンベツマテ四百八十間ノ間谷地也平均四尺盛土	注記	赤	陸
	マクンベツ川下ヨリ川上マテ七百二十一間平均二尺盛土水抜二ヶ所	注記	赤	陸
	此間二百八十間平均三尺盛土水抜二ヶ所	注記	赤	陸
	ピラカヤウス下漁小屋	施設	黒	川
	渡り三間橋	橋	赤	陸
	渡り五間橋	橋	赤	陸
	ヒラカヤウス漁小屋	施設	黒	川
	ヒラカヤウス下ヨリウツナ漁小屋マテ九百四十間笹深流木多ク伐木アリ	注記	赤	陸
	五間橋	橋	赤	陸
	五間橋	橋	赤	陸
	六間橋	橋	赤	陸
	ウツナイ村	地名	黒	川
	上トウヤウス漁小屋	地名	黒	川
	ウツナイヨリハンナグロ境マテ九百間平均三尺盛土水抜三ヶ所	注記	赤	陸
	バンナグロ境漁小屋	地名	黒	川
	四間橋	橋	赤	陸
	バンナグロ村	地名	黒	川
	此間伐木流木アリ小笹多シ	注記	赤	陸
	三間橋	橋	赤	陸
	ヲタベリ漁小ヤ	施設	黒	川
	バラト川	川名	黒	川
	シノロ川	川名	黒	川
右 岸	生振村	地名	黒	川
	中花畔漁小屋	施設	黒	川
	上花畔漁小屋	施設	赤	川
	此間二百間程平均三尺盛土水二ヶ所	注記	赤	陸
	フシコベツ漁小屋	施設	黒	川
	五間	橋	赤	陸
	フシコベツ川	地名	黒	川
	フシコベツヨリサッポロプトマテ凡千三百五十間ノ間笹深流木伐木アリ	注記	赤	陸
	ハッサブト漁小屋	施設	黒	川
	サッポロプト御蔵	施設	黒	川

